604

乘任法師

妻鏡 全

法藏館藏版

妻鏡

無住獨師述

夫難レ受者人身。今既受れ共。眼にさへぎる生死無常を見ても。驚心無けれは。殆ホ石の如し。難レ値者佛教。今亦値共。耳に觸て學せされは。恐くは人の皮を着たる畜生の類に似たり。我身を不レ知。心を以て心を迷へり。譬ヘ酒に醉たる者の。自ら醉へる事を不レ知して。不レ醉人を嘲けり。長夜に眠る者の。夢の中に夢を不レ知して。ねごとをそるに似たり。幾得て世遂に非生なる物の命を斷て舌に味ひ。猥しく財寶を貪て。衣食の許とす。夫財寶は甘毒に似た彼に醉て佛道を不レ行。現世の甘露は。後生の鐵丸と成と云へり。愚哉。一旦の假の身を養はんが爲に。嗔劫多生の身心を亡さんとすることを。然れは天仙は彈指して辱しめ。佛神は胸を痛しみ給ふ。天上の果報と富貴の人ハ。樂にはこつて。穢土を厭ふ心なく。三途の苦報ハ畜道の類は。苦に責られて。佛道を願ふ事を忘れたり。彼苦樂境善惡中間。是人界生也。此生を受る事の希なる事。爪の上の土の如し。余の惡道に輪廻せる事は。大地の如しと云へり。一生間。惡には進み善には物憂心のみ有て。心中に惡業を

のみ造り積む。貪欲は是餓鬼の業因なれは。此の身破るゝ時。餓鬼の身と現し。嗔恚と地獄の業因なれは。死ては地獄の猛火と成て身をこがし。愚癡は畜生の業因なれは。當來には畜生の姿と成て。殘害の苦を受く。鬪諍を企て合戰を好む者は。修羅道に落て苦を受る。に間なし。適〻五戒を持て。人界に生を受たれ共。其中に慳貪の者は。貧道の身と成り。憍慢の者は。下賤の生を受け。誹謗の族は瘖瘂の生を感し。不信の類は盲聾の身と成り。破戒の者は諸根不具の身と生す。持戒の人は六根具足し。人に物を施す心ある者は。富貴の家に生し。人を敬ふ心ある者は高位に生し。慈悲の心ある者は命長く。忍辱の心ある者は形能く。殺生を好む者は命短く病多し。戒定の二ツ備りたる人の。慢煩惱重きは。天上の果報を受て。樂み盡ぬれは。五衰退沒の苦に合て。終に地獄に落へし。譬は箭を以て空を射るに。弓勢盡ぬれは還て地に落るか如し。世善として父母に孝養し。塔を立て諸〻の功德善根を修する人は。皆人天の善生を得て。一旦の樂有と云へとも。正き佛果菩提の行よ。あるへからず。雖レ然。惡道に落て苦を受んよりは。善所に生て佛法に近付く緣と成へし其菩提の行と云は。下に云か如し。凡そ人の果報の勝劣は。前生の戒の持犯に依て也。皆

人今生二果報の拙き事をなげゝ共。後生に善果を可レ得種をうゆる事あし。凡そ人の賢と申は。我身を助け。人の身を助け。今生を資け。後生を資け。父母の生處を訪ひ。生々の恩所を報するを以てす。況や積善の人は。其の家榮へ。積惡の者は。其門亡ぶ。罪を犯さゞりし時。何憂が有し。適善人有て。父母若は師長等爲に。隨分の財寶を投て。孝養を致し。功德を營め共。七分が一ッ。亡者功德と成て。今六分は。修する人の功德と成と云り。然れは沒後に子孫なんど有て。後世を訪らゝんずればとて。我と佛法を不レ行。佛道を不レ願事。愚かなるが致所也。亦孝養の恩に。忠を致と云共。或名聞に住して人聞を兼ね。或い近き僧を嫌て遠を請し。無緣を厭て有緣の僧を撰び。疎を捨て親を求。皆是佛の無遮平等の慈悲に違へるの故に。別請と云て。功德と不レ得のみに非ず。還て罪を招と云へり。亦富貴の餘慶のある人は。或い僧に皈依し。法華八軸妙文を讀誦せさせ。時衆を定て。不斷念佛の勤行を修する。誠に殊勝の功德なるが故に。其結緣不レ淺して。當來に世間の福報共成り。佛法の遠緣共成事疑ひなし。又志す所の父母師君等の聖靈の。重罪を轉して。輕罪と成し。惡生を轉して。善生を可レ得加德とは成るとも。全く彼の施

主と聖靈との。正く往生淨土の眞路とは不レ可レ成。其故一切衆生。悉有佛性とて。皆人に佛に可レ成種あり。眞言を悟る人は。自心中の佛性を悟り顯して。現在に即身成佛の位に叶ひ。法華讀誦する族は。或六根淨の位に叶て。通力自在也。凡五種行に隨て。漸々増益。悪當成佛と云て。終佛道に入者也。三世諸佛。十方如來。皆各心中佛性心蓮を悟顯。乘物とし給へり。今生に此悟を開かさん人。彌陀の本願乘して。淨土に生て。花開の得益に預て。此悟を開んと思へし。所レ謂花開得益者。他力稱名の本願。不思議力に依て。無始本有性得心蓮開所也。然れは自念佛自往生にして。他の往生に。非す。仍て人念誦讀誦を以て。我及志す所の父母師君等の。正しき往生成佛の直因とは不レ可レ思。但追善の志深きは。轉重輕受とて。善生と受る福業とは成れとも。一度は浮ひ。一度は沈む。輪廻の業は不レ盡。此等の道理に付て。嚫刼多生の間不レ遇。如來の教法の教へに隨て。自ら生死を離れ。恩の深かりつる父母の生所を助け。師君菩提は訪はんとは不レ思して。業の引に任せ。悪縁の催すに隨て。日夜に造所罪。朝暮に犯る科。山よりも高く。海よりも深事を不レ知悲哉法華よは。不自見二其過一。於レ戒有レ缺漏とて。人は

皆他の咎を見談して。身の失を知事なし。人の無常をかゞへて。我身の無常を忘たり。是を知るを賢人共云ひ。聖人共申なるへし。世常賢きと思るは。さか〳〵しく。世間の事を辨へ。甲斐々敷。人を置て。財寶を全くし。子孫に傳へ。末代に及し。或は我身を立。人ををしゑたつるを。賢と思へり。是は世間を重くして。佛法に遠ざかる過有に依て。世知辨聰とて。八難の其一ッにして。悪趣の果を招く敵也。財寶を畜心をは。積聚心と云て。是も同く輪廻の業を引大罪也。法華には。諸苦所因。貪欲爲本と說く。愚人は財に依て心を苦め。命を亡す者也誠に一生は盡ると云共。希望は不レ盡して。生より生を引紲也。富る時い。千の口少おき事を歎き。貧き時は。一身の多き事を悲む。田ある者は田を歎き。家有者は家を歎き。妻子眷屬ある者は。是を歎き。有に付ても憂へ。無に付ても憂ふ。一生歎き。一期悲て。遂に其終無し。少欲知足可名福。大欲不足可名貧と云て。少きと得て。足ぬと知て。心を不レ惱を。富りと云へし。富と云共。欲多くして。身心苦くは。貧道の類なるへし。又愚人の云く。智者と云とも。腹を立て。財を貪はる心あり。寒き時は衣を求め。飢たる時は食を願を。貪欲の心。在家の愚人に。少しも替り目無しと

云へり。然るに智者に二つの品あり。一には本より無道心の者。名聞利養を宗として。今生一期樂ん爲に。在家愚癡の族を誑惑し。財寶を貪らんか爲に佛法習要文を誦連て。智者の名を施し。不淨說法を能として。布施を望み。世を諛ひ。自ら福報を祈て。難行苦行して。本尊に祈請し。阿練若に獨住して。賢善聖人の相を示せ共。內穢虛假不眞實の行。本性大欲心に同故に。腹を立。財と貪る心。在家の愚人よりも。愚このなりとす。清淨の佛法を垢し。世俗の不淨と成すか故に。愚人よりも過たり。二には本性柔軟にして。慈悲も深く。道念もある族。生死の一大事を歎き。佛道に進み。知識を訪ひ。佛敎に隨順し。佛の制戒を守か故に。自ら損し。他を損し。今生を損し。後世を損る事。不可有。知識百化として。智者の嗔恚を。極惡の族心を恣にして。煩惱の催に隨ひ。魔緣の勸めに任て。業上に業を重ね。惡の上に惡を加る事を悲に彼れを對治せんか爲に。方便して。誡を加る也。佛も降伏の相として。明王部。乃至外部の天等の。甲冑を鎧ひ。弓箭を帶去て。嗔恚の相を現し給へる是也。智者の財寶と者。本より諸法に自性無故に。深く貪着する心無けれとも。無緣の者を羽含み。佛法を興行し。生身を助け。佛身を祈ん爲に。假り

に財寶を貯たるは。愚人のをろかなる眼には。在家に等しけれとも。智者の賢き心には。化他利益と成て。一切皆佛事に非る事なし。或は側し或は免ぬ。皆是大聖方便也。凡そ賢愚境。能々可存知者也。譬ば人有て。深き淵の邊に望て。岸の上に三人立らんに。人淵に向て飛べと云はんに。無二左右一飛入て。水に溺れて命を失て終りぬ。此の人は幼くして醉者に似り。愚にして狂せる人の如し。是非を辨へす因果に迷へり。水の深き事を不レ知。身の溺れん事を不レ辨へ。是如二我等一ある愚人也。惡友に逢て。惡を造り。罪を造り。罪を犯して命を失ひ。或は財寶を貪り。後生には惡道に墮て。浮事無んを如レ不レ知。又一人を飛と云に。都て不レ飛。此の人は能く世間の道理を辨へ。出世の理を知り。淵に入ては必す可レ死。業を造ては定て惡道に可レ墮。止惡修善謂れを存し。斷惑證理のことはりに明か也。是は愚人の眼の及所。俗家に貴ふる人也。又一人を飛と云に。則飛入ぬ。此の人は水鳥の。水に自在を得。布鼠と云ねずみの。火の中に泳か如し。水に入とも。陸にあるか如し。陸にあれとも。水に有か如し。智者の心も如レ此。善惡の二法に於て。都て煩ふ事なし。又大海の。水の清濁を不レ嫌。大地の。不淨を不レ厭か如し。一切不淨

の中に。愚癡を以て第一とす。古人の云く。智者の作る罪は。鐵鉢の如し。大なれども不レ沈レ愚者の造る罪は。砂礫の如し。少かけれども沉むと云へり。祇陀末利か。唯酒唯戒。和須密多か。婬而梵行。智者に非すは。不レ可レ知。釋迦如來は。三界の獨尊。久成の如來にて。まし〳〵しか共。三人婦人に。三人の御子坐しけり。優婆磨比丘。羅睺羅比丘。善星比丘是也。然とも不淨の佛とは不レ可レ申聖德太子は。救世觀音の垂迹。我朝佛法を弘めんが爲に。來化し坐しき。然とも五人の御子あり。剩へ守屋を打。殺生業を犯し給しをも。不法の太子とは不レ可レ申。此御振舞。皆是菩薩の大行佛果の御功德。利生方便の謀也。智人は業即の解脫と云て。善惡不二の謂を覺り顯して。迷悟一躰の理を覺りぬれは。一色一香中道に非すと云事かし。狂言綺語の誤まても。轉法輪の緣と成へし。凡佛者。善惡共に明かに。無相にして衆生を利し。凡夫者。是非共に暗くして。眼前の法に迷へり。凡そ愚人の行をは。人皆知る。智者の行をは。智者に非んは不レ可レ知る中比。南都に智光賴光とて。二人の僧あり。斷金の契を結ひ。芝蘭の語を成て。一生を送るに。智光は鎭に難行苦行し。常坐不臥し。念佛讀經し。供養燒香に隙を空くせす。賴光は經をよみ。佛

を禮する態もなく。床に臥て晝夜に眠り。床に坐して一生懈怠也。然に生者必滅の理り遁難くして。賴光契を捨て。先にはかなく成にけり。智光是を悲て。賴光一生懈怠にして。勤行をる事無して。何なる惡道に墮て。何なる苦をこの受らんと。佛神に祈請して。彼の生所を知らんと。祈り悲みけるに。或夜の夢に。賴光來告云く。我一生の間實相の觀解に依て。終に佛果菩提を證し畢ぬ。無レ墓哉汝有相の修行に一生を送て。終に無爲の佛果を證せすして。生死の果報讀さらん事よと云て。夢覺めけり。余よりして。智光も無相の觀門に入て。共に菩提を證しけり。泰澄は大師の御弟子に成り。臥行者とて。大師いみじくほめかしづき給ひけるも。賴光か如く也世の人の無レ墓詞にも。愚者の萬行よりも。智者の居眠と云へるは。此の意かるへし。譬は十二時に隙を空しうせす念佛讀經に功を運び。供花燒香の供養をのへ。或は三密の行儀に付て。三時の行法を修す共。人我を空せすして。自利の行に向は。有相の行は。必す世間の有相の德用なる故に。其名を遠近に施し。其德を貴賤に顯せとも。必しも佛果菩提を證する事かし。在家愚癡の眼の前には。行業も關け名德も備りたる人を。佛の如に貴み敬へとも。生死を離れ菩提に至る事。必しも行

徳には依す。又智恵才覺にも依べからす。調達か八萬藏を誦せしのとも。三途の焔を脫す。志賀寺の聖人は。三密の行に功を運しかとも。一念の妄心に依て。青鬼と成と云り。行業薫習積て。驗徳いみじけれとも其心地暗くして。本分に叶す。自性に叶はざれい。佛果にも到す。行業を修する故に。六道にも不二輪廻一。愚癡類の中には勝たる故に。憍慢の心しは〳〵發て。終に魔道に落へし。然れとも佛法の結緣空しからされば。久く魔道の苦を受て。遂は佛道に入と云へり。凡そ智者の持犯は。輙く其罪福知り難し。其意測り難し。愚僧か如なる矇昧の族。なまじひに髮を剃り。衣を染めたるを以て。僧の名を借たれとも。大小乘の律儀の中に。一戒をも守す。權實二教の中に。一宗をも學す。世俗貪愛の念い。在家に齊しく。不信放逸の心。闡提にも過たり。如し此の族ら。佛神にかたより人の歸依を受。隨分信施を受こと。愚者の劒を逆に呑。夏虫の色に耽りて。焔に入に似り。僧を學へい。君に仕て國家の恩を報する事も無く。行學に携らて不二修行一內證外用功徳も欠たり。然れい僧にも非す。俗にも非す。縱ひ今生一期は。在家を貪り。愚人を誑惑して。事故へ無く過れ共。當來には惡道に墮て。苦を受ん事。大地を的にせるか如し。又神明に

依て。信施を受る輩い。多分い蛇身を受へし。三寶に寄て信施を受る者い。必す畜生道に墮也。或人の云く。讃岐院の御時とかや。照月上人とて。高僧まし〳〵けり。智恵も賢く。行徳も勝れたり。南都北京に。敢て肩を比僧無りけり。院御師徳と成て。面目を都鄙に施せり。然れとも生者心滅い。賢愚を撰いぬ習にて。上人重病を受て。遂に他界せられにけり。三四年を經て後ち。或夜。院の御夢に。彼の上人來て申されけるい。明日より此御內に參り侍んず。故に不便に思召され候べしと申されけれい。院本より師匠と憑。疎さる上い。いつまても變改あるへからそと。御答有。打驚のせ給ぬ。怪しと思食て。明日を待て明させ給ふに次の日。奥州より白き馬の太くたくましきを。將て參りたりけれい。御夢よ思食合せられて。世に不思議に御慮ありけり。抑此馬に。名い無きかと。問せ給ければ。てる月と申す也と。奏問しけれい。てる月とい。照月と書たり。彼の上人の名也。明日來へしと。兼て告けれは。此馬の事也けりと哀に思し食しけれは。殊に勞飼せ給ける。是自性に叶す。心地に暗き僧の。信施の罪業に依て。親畜生道に落たりける。一つの證據也。又或人の云く關東相州の時奥より大名達の。參り集りたり

けるに。或人問て云く。近代奥州より。古への如くある名馬の貢馬立さるは。何なり故そと問けれは。答云く其事にて候。當世天下に。然るべき高僧御坐さる故也と申しけり。是は無智無道なる高僧必す吉馬と生るゝ謂れを思て答るあり。大方之人界に戚德ある僧に成ぬれは。同宿眷屬と。多く羽含くみ扶持するは。一分の慈悲也。無遮平等の慈悲には非んとも。近きに施す謂れあり。然れは小智愚鈍にして。佛果菩提に叶はすして。徒ら に人の歸依を受け。信施を貪るに依て。畜生道に落れとも。隨分の慈悲を以て人を扶持し養育したる功に依て。車牛と成て痛り飼れ。或は貢馬と成て。食物豊か也。道理必然也。努々。疑ひ成すべからず。如此の道理を辨まへて心有ん人能々用心あるべき也。又近き比二十餘年前の事也。越中の國に森尻と云ふ寺に。智妙房と云一人の僧あり。信施を貪はつて。世を渡るの計としける間。數多の旦那を引具して。立山の禪頂參詣をけるに。道の間に。金鎖をゝろして。岩石を上る所あり。彼を登り上て見れは。先に立たりける先達の智妙房。白き帷に。黑き袈裟を懸たりけるか。牛に成て。谷に向て迷ひ行きけるを。且越の者共。淺增申す事計りあし聲々に彼の僧の名を呼ひけれとも。牛の吼る聲のみ

して。かきけすやうに失にけり。然とも旦那共は。入堂して下向しけるに。此にて此僧の失せにし事よと哀れみ悲て。又彼の僧の名を。聲々に呼けれは。厳おる牛の姿にて。谷より登上りけるか。驚て牛の吼る聲計して遠かり失にけり或人の云く。讃岐國に。無智無道なる僧あり。或時。弟子の僧と火に當て居たりけるか。此僧居眠て。うつぶきけるか。讃岐わらさのへりに。食付事二三度に及ひける。時に對座に居たる弟子の僧不思議の思ひを成して。件の僧に申けるは。眠の間。何ある夢をか見給たりけると問けれは。其事也。或路の邊を過ると思ひつるに。青く萌へ出たる草を。一ト口食て見れは。ゐみじく味のよかりつれは。二三度と思て。覺たる也と語けり。是も現身に。畜生道よ墮たる。一ッの證據也。縱ひ現身よ受ることこそ希也共當來よ受ん事。疑ひおかるへし。在家の愚癡の族。所愛の僧を撰ひ供養するは。彼の信施積て。惡道に墮せは。還て怨と成る故に。施主福報と成る事なかるへし。僧に親疎を撰はさるを。無遮平等と云なるへし。高野の大師の曰く。一鉢の疎飯。十種の恩德有と云り。凡そ人は皆心ろより沉み浮ふおるへし。生死を離れんと思ふ志し深き人は。必す菩提を證し。其志し無き者は。輪廻して昇沈の果報を受く。

如レ此の道理をも用ひさる人をは。強剛難化の衆生と云て。諸佛も利生を空し。祖師も方便の術を徒らに成て。悲み歎き給ふ者也。抑曠劫流轉の古を顧。三界六道の果報。何れか是不レ經。釋梵轉輪床の上よも久く栖き。洞燃猛火の焰の下にも幾度か焦れし。飛類として空を翅り。流類として水に潜り。山の鹿野邊の虫三有の栖。四生の姿貴きをも受。賤きをも受。皆是無道の境。有爲の姿なれは。旅人の一夜の宿の如し。嬰兒のはかなき戯に似たり。悲哉四生の昇沉皆受しかとも。未レ受二紫摩黄金色身一。六道の岐悉く見しかとも。未レ伺二三賢十聖果報一。等覺妙覺位一也。何已に經界賤栖を望て。未レ踏佛果の高位を求さるや。設ひ自ら帝位たりとも。何の益ろあらん。聖衆來迎蓮は。柴の樞をも撰ぶ事なし。誠よ剎利も須陀も替ぬは冥途の習也。優にも耻す。武にも畏す。獄卒怒れる姿にて。呵責の詞に云く。人の造れる悪業にも非ざれは。人の受へき苦にも非す。自から作る罪に依て。自苦を受る也一切衆生も亦爾也と云り。或人の云ふ。豈泣じとするとも泣ざらん哉。阿防羅剎の呵責の庭。豈咲じとすれとも咲ざらん乎聖衆來迎の柴の樞と云へり。縱又一國の主たりとも大國の王に比すれは主の如く從者の如し。設ひ亦輪王

釋梵の果報也共。等覺妙覺の位に比れは。雲の如く泥の如し。上界の天衆の。人間の命を見る事。蜉蝣と云虫の。朝に生て夕べを侍ざるよりも甚おし。其身の賤き事。蟻にも劣り。蜩にも劣れり。如レ此の人身を愛し。人界に執心を留て。淨土の快樂を願さる事。蓼を喰む虫の。甘き事を知ざるか如し。唯樂にも苦にも。一念を隔れは。昨夢の如し月の影の移り易く。日の光り傾に隨て。無常の責め近付事を知ず。市に交り。巖に隱し族も。生者必滅の理をは遁れず。雲に入壺に入し仙術も。命を愛して命を亡す類也。誠末の露本の滴。後れ先立つ。老少不定の習。賢きも死し。愚なるも留まらず。有爲無常の理り。知り顔にして驚く事おし。昔佛と阿難と。乞食の爲に城邑を廻り給ひしに。夕へに成て。阿難歸て。佛に申し給けるは。今日乞食の間に。不思議の事を見候きと。佛何事そと問給ふ。阿難答て云く。今朝或家を見れは。數輩の俗人連り居て。美酒を湛へ。珍物を調へ。酒宴歡樂し。管絃亂舞して。千秋を歌ひ萬歳を祝する聲あり。齡盛にして富貴豊饒おる事。三禪の樂の如し。歸樣に聞は。彼の亭主。無常の風俄に吹て。草露の命忽に消。奪レ精鬼競來て。有待の形空く破れぬ。懸間。妻子と天に仰て是を歎き。眷屬は地に伏て

是を悲む。遠近弔を成し。親疎是を訪ふ。見者は泪を流し。聞者は心を傷しむ。不思議也つる有様哉と申し給ふ。佛又曰く。我も今日頭陀の間に。不思議の事を見たり。或家を見れは。門高く家富て妻子皆備り。眷屬悉く豐也。年齢盛にして。富貴心に任せ。種姓高貴にして。能徳皆備りつる者。老少不定の理遁がたく。盛者必衰の謂を免れず。朝より夕へに及はすして空く成つる。不思議さよと仰有けり。凡そ生死無常は。心に任ぬ習にて。二度人間に歸ること希也。老て又若きに歸る事なし。瓮に滿たる貯へ。箱に餘れる財も。命を買事無く。業を償ふ賄賂とは成す。彭祖か仙術。淮南か神術。徒らに有爲の境に留て。法身の惠命をは得さりき。松樹千年終に是朽ぬ。樣花一日の榮に誇る事なかれ。樂天の云く。古墓何の代の人そ。姓名を知らず化して土と成る。西施か顏色今何にか有。春風百草の邊と云り。愚哉。入逢の鐘を聞とも。無常の聲に驚き。今日も空く暮行て。佛道を修行し。來世の貯を營む事無くして。遂に有終まじき今生一期の爲に。世を誑ひ身を助けんとして。輪廻の業を重ぬる事を歎す。曉の鳥の音にも驚らす。今夜も徒らに明して。念佛讀經に功を重ね。坐禪工夫に時を移す事無くして。世間の營を思ひ連ね。

名聞利養に心を費す事を悲しまず。時の鼓の音を聞共。月日の影の移り易く。來し方行末の近付て。我身の老と成る事を顧みす。人は皆無常の理に迷ふて。邪見の心を改めす。念々皆無常なり。諸法悉く自性無し。眼の明かある者い。一期の生滅を見。刹那生滅の謂れを知て。心を細にして見る時は。思ひと思ふ心。成しと成す態。一法として無常に皈せすと云事なし萬事は。皆緣より生して。緣に隨て滅す。始め有る物は終りあり。念々皆始終あり。何そ是に於て常住の思ひを成さん。昔唐朝に。北叟と云者あり。世間の無常を知りけれは。君に仕へて名利を貪る心も無く私を顧みて財寶を貯はふる思ひも無かりけり。都の北に居所をしめて。柴の庵を結びて身を宿し。麻の衣を着て寒を防き。草をつみ菓を拾て飢を慰めて。日夜を過し年月を送りけり。悅ある事を見ても少し咲み。憂ある事を聞ても少し咲けり。是は悅も憂も終に久しからす。善も惡も皆夢と成り行く。無常の理を能く知て也。今の人も。少しゑみたるを。はくそ笑ひと云へるは。此の北叟か事なるへし。然れは後鳥羽法皇。隱岐國に御配流の。述懷の御製に云く。いつとなく北叟が如くせば。此ことはりや思ひいれなむ何事も皆因果の理り。先生の宿業の報あれは。強ちに

悲み。強に喜ふべきに非す。因果必然の道理善悪の果は必す善悪の因より生する者也。此善悪の二ッは。共に輪廻の業として。昇沉の果報を受くへし。又世善を修して世間の福報を感し。佛法を行して。佛果菩提に到るべし。小因大果と云て。纔に善悪の業因に依て。多く善悪の果を感すへし。喩へは草木等の。一粒の種を植て。百千の實を結ぶが如し。凡そ道念有る人と。聞處より發心しぬれは。今も行と行末にも亦行すへし。本より無道心の者は。生死一大事を歎き悲しむ心無き故に。今も行せざれば。後も又行すべからす。善人は善にすき。悪人は悪よすぐへし。知れる者の能くすかされは。知れる物の意を知らさるなり。知らさる者の能すけれは。知らさる物の意を知れるなるへし。然れは。すかざる物は知顔にして。知らさる者也痛ましひ哉。我等。佛の深く誡め給ふ。名聞と利類とを。朝夕の所作とし。煩悩と悪業とを。日夜の仕態として。一生空しく馳過して。臨終喪命の時。斷抹摩の苦に責められて。顚倒し狂亂して。悪趣の相現する時。一生の耻辱を。万人の前に顕れん事。敢て人の料に非す。夫れ煩悩は無始より以來。久しく來りし友おれは。心を苦しめ身を亡すれ共。猶嗜み易くして捨難し。佛法は今始めて逢へる故に。疎くして馴難

し。古人の云く。寧ろ智者と其に死すとも。愚者と共には住せざれと云へり。若し智恵も賢く道念も有らん人をは。諸佛の使ひ。世に出たりと知て。歸命を致し。供養を演ぶへし若悪縁來つて僞り親しまは。地獄より阿防羅剎の使ひ。我れを縛り取と意得て。近付事おかれ。人は皆友に依て。振廻を成す故也。又寂勝王經よはし。若し人有つて善を修し佛法を興行すれは。所領主は是を雖レ不レ知。善人を扶持する謂れ有故に。七分一。其功德を得と說り。又悪人有て。悪を行せしも。之を知らすと雖とも悪人を扶持する科重きが故に。七分か一つ。其悪報を受へきなり。又生身を助けて。佛身を祈るへき謂れ有に依て。運命の極まらさらん程は。佛神に祈誓を申して。中天を除き。三寶に歸依して祈る事有ちは。彼の佛神三寶の御心に相叶ふ樣に意得へし。凡夫すら我れに似たる者吉しと思ふ習ひなり。其の心に違へは多力を入れても。益を得る事無し。佛神には。平等一子の慈悲まします。衆生にと彼此愛憎の心有るゝ故に佛意にも差ゐ。神慮にも叶はす。凡そ功德と。功を積み德を累ぬるに依て。神明三寶の御惠あり。然るに人を惱し煩いし僧を狂惑して。祈誓を致し。功德を行せは還つて災を招き。業を積む計てとゝは成る共。其の益無事。水よ繪を書

き鏤むるか如し夫れ凡夫皆愚かなれ共。中にも女人の罪重き事を。聖教に多く出されたり。繫きに依て。委しく注すに遑あらず。南山の道宣律師の云く。要を抜て。女人に七種の科を出せり。一者。男に愛欲の起る事萬水の流れの。海に入に厭ふ事無きが如し。二には家の内に女類の有るを見て。妬む心怠らす。口には相親しみで心には怨を成す。他を除き。唯己れ獨たらん事を思ふ。三者。偽り親しむ心有るに依て。人を見る時。未だ物を云ざる前きに咲む。口には相思へる由を云て心は隔て恨むる思ひを懷く。身は向ひ意は背けるを偽親しむと云へり。四には。放逸にして偏に身に吉衣を重ねん事を思ひ。面目を旨として。他の愛念を臨む。欲に貪着する心深ふして親しき疎きを云はず。五者。偽りを宗として眞の詞少なし。しば〳〵人の惡しからん事を誓て。罪の積る事を恐れず。六には欲の火身を燒て人の耻ず。心迷ふて刀杖を恐れず。醉たる如くにして耻辱を知らず。七者身常に不淨にして。虫血數流れ出つ。懷妊産生けがらはしく。月水胞胎不淨なる。是を見て惡鬼は競ひ。善神は去れり。愚人は愛し。智者は憎む。昔し佛在世に。千邪女と云ふ女人あり。本より外道の家に有て。佛を妬みたてまつる心深し。然る間。佛に耻をかゝ

せ奉つらんと云ひて。鉢に緒を付けて。頸より懸け腹に當て。衣を覆つて。佛の說法の所に行いて。菩薩聲聞。人天以下。稻麻竹葦の如くなる所を分け入りて。佛に向ひ奉て。腹を叩き聲を擧て申しけるは。是を見給へ。是こそ佛の御子妊みたれ生出して佛の耻さらし申さんと罵詈けり。佛の御弟子。神通第一の目連尊者。是れを見て。鼠に變して。鉢を緒を食切りて。佛の御前て落したりけれは。其の腹ちゐさく成りて。佛の御耻とは成らずして千邪女が耻と成つて。色を失ひけり。又天竺に演若達多と云ふ女人あり。其の心甚狂亂して。獼猴の如し。或時。鏡を取て影を浮べんとしけるに。餘りにあはてさはいて。其の形ち見へさりけれは。我か頭失せたり何がせんと云ひて。天にさけび地を叩ひて。歎き悲しめ共。彌狂へる心のみ增りて。遂に頭を見る事を得ざりき。一切衆生は。本より佛性を備て。且らくも去る事無けれとも。妄念の雲厚く隔てられて。心性の月を顯はす事無けれは。常沒の凡夫たりと思へり。演若達多か頭も。全く失さりしか共。心の騷ぐまゝに。心地の鏡も曇り。頭をも失おへる也。震旦には國土の災の起る事。三女より始まると云へり。我か朝も。尊成天皇。女の勸めに依て。叛反を思食し立て。終に配所に赴き給ふ。大方は

如此あれとも。女人の中にも。慈悲も深く。道念あるも又多し觀經の發起には。韋提希夫人。法華の不思議は。龍女ゝ成佛を說たり。友人罪重き事を知なは。心を改ためて。一旦夢の世の名利の營なみを捨て。生々世々に身を助くへき。佛法修行に趣くへし。一生ゝ問。惡には進み善には退ぞく心のみあり。彌〻くらきに入り。深きより深に沈む へき態のみあり。凡そ業は秤りの如ち。重き方へ引るへし。若人一生か間の善と惡と。若は一年一月一時を過す間に造る所の善業と惡業と勝劣を校量せんに惡勝るれと惡道に落ち。善勝るれは善生を得へし。是皆俱生神の札の面てに。微塵の罪をも漏さす記されたり。止觀に云く。天は我ゝ隱す罪を知れり。何そ天に耻ざらん。人と顯はるれは罪を知れり故に人に耻へしと云り。醫へは物の命を斷ちて人の物を掠め取らすと云共。思ひと思ふ事。罪ならすと云事なし。人一日一夜を經るに。八億四千万念あり。皆是三途の業也と說けり。亦直に惡を行せすして。善には進。惡よは退ぞく心有る共。持つて是を思ふへからす。一度は浮べ共。一度と沈むべし。然らば止惡修善の心を地として。此の上に。此度ひ正しく生死を離れ。菩提を證すへき。有緣の行を立へし。其行は。悟入門には。心地修行。

口稱念佛也。此二行は。多聞廣學を撰す。有智無智を論せす。信心堅固にして。佛敎に隨順し。晝夜精進して。智識の敎をたのへざれは。直に生死を離れ。菩提に到る事。掌を指すよりも易しとす。其の心地とは。四家の大乘。並に宗門に勸むる所の修行也。敎內には人に敎へられて月を見か如し。敎外には我れと月を見か如し。夫れ一切衆生の本心本佛は。鏡の箱の中に明らかに月の雲ゝ上に圓あるか如し。此れ月を隱す雲は。是れ諸の境界に依て發る所の妄念也。然らは彼の塵境に移されつる。前の心は何物そと明かに見顯すを宗門には。一念不生の處と云。敎には無相の心地とも云也。此處よ叶ひぬれと一心不生ある故に。萬法森羅なれとも。一心と萬法と等しけれは。生を引事有へからす。然れは惡道に落る事も無く。淨土に生する事もなし。今ま淨土を願人も遂にゝ此悟りを開かん爲也。佛法も世俗も聊も物に礙り胸に當り心に觸て。恐るゝ所の念相は。皆巢臼と成り。本分を別る事。天地の如く懸隔せり。自ら工夫して通り得る故に。佛祖を用ひす三世の諸佛十方の如來。此の心地を悟らすして。菩提を證し給へる道無かるへし。次よ口稱念佛とと機の利鈍を取らす。罪福の多少を撰ばす。直に本願を信して。餘行を兼す。一心に稱念して怠

らさるを。決定往生の業とす。謂る一心とは。三心也。三心とは信の一字也。然らは信の一字に落付なは。三心も捨つへし。念佛の一行に落付なは信の一字も捨へし。善導等の五家の釋。三心の配立。皆信を取せて。念佛の一行に落居せさせんか爲也。夫れ足代無して。屋を造る事無く家を立てゝ後。足代を置謂れ無し。然れは念佛の家を立おは。法門の足代をも捨へし。世の常の行者は。三心等の法門ゑ滯つて。念佛の行を疎かにし。才覺に携はつて。安心を忘るゝ也。然れは小知は菩提の妨にして。眞の往生の機に成る事無し。在家の愚人に劣れり。在家の人の中に。適念佛する輩は。智惠も無く。私無き故に。中々本願に叶ふて。往生する者多し。般若の大智。必す愚癡に同をる謂れ有故也。緣覺の行儀を學ひし獼猴も。終に聖果を證し。念佛の口まねをせし鸚鵡も。舌の端より蓮花生したりき。都て行業の久近を問す。是非の機にいろはすして。唯今の稱名の一念。即ち是別願所成の彌陀の身土也。然れゝ申す時は即ち往生也。申さゞる時は不往生也。罪人也。本願を信し。出離の一大事を。思ひ入たる符には。自然と念佛ゟ申し度て。念々相續せらるゝ也。譬は淨土の法門を口に囀り。人を教化して。智者の名を施し。後世のをぼへを取て。

人に貴まるれとも。自ら念佛せすして勸むるに。勸めらるゝ人の往生にして。勸むる人の往生に非す。抑身口意三業の中に。上の心地修行は意業稱名念佛の口業。律を守り威儀を正しうするは。身業也。此の外に眞言密教とて。大日法身。三世常恒自受法樂の說あり。其機に非されは。十地の菩薩なれとも。入事希也。在家なれとも。信心堅固ゑして。宿習開發せん人には。立印加持。護摩灌頂なんとこそ。左右無く授す共。教相を經て。當躰成佛の謂れを明らめ。光明眞言等の法は。あなのちに憚るへきにあらす。此の法是諸宗の最頂。萬法の惣躰。生佛一如の根本。事理俱密の秘法也。舌相の言語は。皆是眞言。身相の擧動は。皆是密印。所有の心相は。自ら三摩地なりと云り。此意を能々悟顯すを。眞言の秘觀とす。是れ餘宗に闕て書さゞる所也。諸宗は皆釋迦應化の說也。眞言は大日如來自性法身の說也。佛果の上の法なるに依て。三賢十聖の位も。窺かふ所に非す。然れは此の教に遇ふ人は。地位の漸階を削つて。等妙の頓旨を顯はす速疾神通乘也。希に人身を受け。適佛教ゑ値て修行せん。同じくは此の法を修行して。直に即身成佛の位に叶ふへし。若し其の機に叶はをは。いつれもく。心の引んに任せて。佛道修行すれゝ。遲速不同は

有れ共。終には生死の苦海を渡て。菩提の岸に到る者也。佛は直に大乘を說て。衆生を度し給ふへしといへとも。中下の機は。多く漏るゝに依て。小乘權教等の法を。兼て說給ふ也。凡そ髮を削り衣を染たるを。僧とすへからす。在家の姿なれとも。慈悲道念も有つて。佛道修行に功を積れと。是僧なるへし。螺髮梵王。維摩居士の如くんは。俗の形也と云へとも。地上の菩薩深位の大士也。我朝にも。上宮太子。役優婆塞。俗躰にてまし〳〵しかとも。皆大權薩埵也。二乘い出家の形也と云ふ共。其の心狡劣にして。佛道に背けり。況や末代凡夫。首を剃り衣を染めたり共。眞實の佛道を修行せす。適學する者は。皆佛法を能藝として。渡世の爲狂惑の手立とせり。淺增共申す計りあし。亦機根一よ非されは。敎も萬差也。大小權實の敎法は。皆釋尊一師の說也。然る間。試に畧々のいはれをほのめかして。有緣の類を引入れんか爲也。適佛道修行する人は。我宗に違ひぬれは。誹り妬む事誘法の咎を遁れ難し。自法愛染の故に。毀二皆他人法一。雖二持戒行者一。不レ免地獄苦一云へり。然れとも轉向大乘とて若大乘に勸むへき機有らは。小乘の執情を破して。大乘に引入すれは。利益莫大也。努々大乘を捨て。小乘に入事なかるへし。又難行苦行は愚人の

行也。易行易修は智者の行也。法華經には。世間之樂及涅槃樂と說けり。世間之樂とは。財寶に豊にして。衣食に乏しからす。酒宴歡喜し。人に仰かるゝを樂とす。是れは一旦の興催し。心を娛は樂あれとも。終には輪廻の業と成て。冥より闇に入る罪業の因也。涅槃の樂とは。佛果の樂也。智者の樂行とは。法界を以て道場とし。身心を以て佛國とし。三密を以て本尊として。行住坐臥纖毫の隙も空ふせす。諸尊の三摩地に入て。諸佛の萬荼羅を見る也。若心地に向ふ時は法界も無く。道場も無けれとも。此の心法の不生なる所。即ち諸佛の道場也。法界身を成する時。心佛衆生の三は。差別無き所也。此の所は愚人伺ふ處に非す。補處の究極。尊の初心に及はすと云へり。又小乘より極めたる佛果い。大乘の佛には位遙かに劣れり。釋論に云く。自乘得佛名望後作戲論と云へり。小乘に佛の名を得たれとも。後大乘に望むれは戲事と成ると云へり。佛道修行せん人努々未得己得。未證己證して。中途に留まる事莫れ。瓶緒短くして。井水渴きたる疑を成るへからす。得ざるを得たりと思ふは。機の賤しきに依て也。凡そ人は皆憍慢の心に依て。習ふへき佛法をも習はす。學すへき聖敎をも學せそして。師を賤み人をさけしめて。終に愚癡文盲の者

と成る。然れは憍慢の心に過て。身を徒らに成す程の歟は無かるへし。止觀に云く。大聖出入。其の法を求めて其の人を取らす。雪山童子い。鬼に隨ふて半偈を受け。天帝は畜を拜して師とせりと云り。然れは佛教を習ふ志し如レ此。若を憑みて懈怠を致すへからす。此一大事を擱て。輪廻の業に。空く一期を送らん事。後悔すとも益有るへからす。是則ち愚なる心の一節を先として。玉もゝくつも。分つ方を知らす。後人の嘲をも顧みす。浮かへるに隨て何と無き水莖のそさみ定め無き浮草の言の葉を書集めて。甲斐なかるへけれと。常に是を身に隨ふて心わらん人。道心者に見すへけれは。名を妻鏡と云なるへし、

本云

斯書則長母寺開山無住一圓長老之所作也。可レ謂盡レ善矣。亦盡レ美也。轉凡成聖。利生方便之直路歟。

妻鏡畢

明治二十五年九月一日　印刷
同　年同月二日　出版

京都府平民　西村七平
京都市下京區中珠數屋町烏丸東へ入二十人講町二十二番戸
挾訂者

京都府平民　西村七兵衛
京都市下京區中珠數屋町烏丸東入廿人講町廿二番戸法藏館
發行兼印刷者

發行所　法藏館
京都市東六條中珠數屋町

新刊廣告

宗教哲學骸骨

徳永滿之著　全一冊　正價金拾五錢　郵稅金貳錢

目次

第壹章　宗教と學問　○宗教心○宗教心の對境○道理心と宗教心○道理と信仰
第貳章　有限無限　○有限無限○依立獨立○絶對相對○唯一多數○全体部分○完全不完全○諸性提結○二項同体○有限無數○有機組織○主伴互具○自力他力
第三章　靈魂論　○靈魂○靈魂諸說○靈魂有形說○靈魂無形說○靈魂自覺說
第四章　轉化論　○轉變○一体貫通○轉化と遺傳○因緣○因果の理法○絶對因果○靈魂開發
第五章　善惡論　○善惡標準○標準諸說○幸福說○良心說○經典說○道理說○標準確定○善惡質量○有覺無覺○諸說通會
第六章　安心修徳　○因分果分○因分二素○安心○修徳○二素併說○成道往生○樂土○比說○無限の數○成道可得○宗教と道徳

己上

大家說教演說

多田了和編輯　正價金七錢　郵稅金二錢

本は佛教の高く且つ深き徳化に浴せしめん爲に文學博士南條文雄師說教　嗣講雲英晃耀師說教擬講吉谷覺壽師說教　同師演說　一等學師補小栗栖香頂師教說　同師演說等の筆記を輯めて一小冊とし世に公にせ乞ふ一本を求め玉へ

嗣講　楠潛龍師題字
同　占部觀順師題字
同　細川千巖師序文

眞宗大學寮講義年鑑

太藤順海　編纂　正價金十錢　郵稅金二錢　全一冊

一講義年鑑ハ大學寮創立已來ノ講義ヲ蒐集シタル博覽場也
一講義年鑑ハ高倉ノ學園ニ咲ケル萬花ヲ集メタル百花園也
一講義年鑑ハ高倉學匠ノ位階轉進ノ順序及國名寺號等ヲ知ルノ略履歷書也
如是ナルカ故ニ宗學ニ志アル者高倉先哲ノ遺記遺錄ヲ繙ク者ハ座右不可欠ノ必要書也

演說教必要書　沙石集

凡五百ページ　正價金五拾錢　郵稅金六錢　全一冊

本書は無住師獨技の智見を以て百二十ヶの條目を立て故事來歷を明にしたるを以て說教の良師友となり大に世を益すると雖も原板已に湮沒に歸し點畫不瞭にして文字を解するに困難の箇所多々生じたるのみなら之且大本十冊にして提携閲覽に不便なれば各位の遺憾とする所なり今般幸に點畫を正し活字に更へ縮刷出版し僧俗諸君の便益に供す

大谷派本山撿定濟
一等學師補小栗栖香頂師閲
擬講　吉谷覺壽師撰

●三帖和讃講述

全拾五卷
合本全三册

薄葉和綴（正價金壹圓五拾錢　郵税金拾貳錢）

洋紙凡千余頁（正價金壹圓貳拾錢　郵税金拾貳錢）

抑三帖和讃ノ其平易ナルハ三歳ノ童子モ能ク之ヲ誦スレトモ其義ノ深遠ナルハ八旬ノ老衲モ其ヲ旨ヲ盡スコト難シ故ニ昔ヨリ末註講義ノ世ニアルモノ汗牛充棟モ啻ナラサレトモ或ハ簡畧ニシテ幽意ヲ盡サス或ハ廣博ニシテ的旨ヲ辨ヘ難シコレ和讃ヲ解釋セントスル者ノ困難スル所ナリ然ルニ今此書ハ吉谷擬講カ其繁廣ヲ簡去シ其精要ヲ採擇シテ之レヲ講述シ更ニ本山ノ撿定ヲ經ラレタル所ナリ然ルニ曩ニ洋紙摺ニシテ出版スルニ第一版ヲ公行シタリシモ已ニ數部ヲ餘スノミ茲ニ於テ今回縮素諸君ノ渴望ニ應シテ第貳版ヲ出版スルニ薄葉紙ニ印刷シ既刊シタリ之レニ由リ眞宗ノ教義ヲ擔任セラルヽ僧侶諸君ハ其ノ信徒トトモニ翫味熟讀シ給ハンヿヲ

發行所　京都市東六條中珠數屋町　法藏館

604

019740-000-5

特16-162

妻鏡

一円/著

M25. 9

ABG-0545